神奈川県立博物館発掘調査報告書

第 19 号

大磯丘陵横穴墳墓群 (2)

A REPORT ON THE ARCHAEOLOGICAL EXCAVATIONS
BY KANAGAWA PREFECTURAL MUSEUM

No.19

YOKOANAFUNBO OF ŌISO (2)

神 奈 川 県 立 博 物 館
KANAGAWA PREFECTURAL MUSEUM

Nakaku Yokohama Japan
1992

神奈川県立博物館発掘調査報告書第19号

大磯丘陵横穴墳墓群（2）目次

Ⅰ．調査の概要 …… 1

Ⅱ．大磯町所在横穴墳墓群個別記録

1．庄ケ久保横穴墳墓群 …… 4

庄ケ久保第8号横穴墳墓 …… 5

2．堂後下横穴墳墓群 …… 8

堂後下第9号横穴墳墓 …… 9

Ⅲ．調査所見

構造形態 …… 15

線刻画 …… 16

第1図．大磯町域内横穴墳墓分布地域仮区分図 …… 2

第2図．旧国府地区内調査地点地形図 …… 3

第3図．庄ケ久保第8号横穴墳墓実測図 …… 6

第4図．庄ケ久保第8号横穴墳墓奥壁線刻画 …… 7

第5図．庄ケ久保第8号横穴墳墓左壁線刻画 …… 7

第6図．堂後下第9号横穴墳墓実測図 …… 10

第7図．堂後下第9号横穴墳墓奥壁線刻画 …… 12

第8図．堂後下第9号横穴墳墓右壁線刻画 …… 13

第9図．堂後下第9号横穴墳墓左壁線刻画 …… 14

第10図．早野横穴墳墓奥壁線刻画 …… 17

第11図．堂後下第12号横穴墳墓右壁線刻画 …… 17

図版1．(1) 庄ケ久保横穴墳墓群

(2) 庄ケ久保第8号横穴墳墓

図版2．(1) 庄ケ久保第8号横穴墳墓奥壁線刻画

(2) 庄ケ久保第8号横穴墳墓左壁線刻画

図版3．(1) 堂後下第9号横穴墳墓奥壁線刻画

(2) 堂後下第9号横穴墳墓右壁線刻画

調査主催	神奈川県立博物館
調査期日	昭和61年3月15日～3月24日
調査担当	専門学芸員　神澤　勇一
	主任学芸員　川口徳治朗
協 力 者	大磯町教育委員会・大磯町郷土資料館
報告書作成	川口徳治朗

Ⅰ．調査の概要

地域博物館の研究対象の一つとして、神奈川県下に顕著な存在を示す横穴墳墓を取りあげている。横穴墳墓は県域を越えて、形態変遷過程、編年、群構成、群形成過程、被葬者の階層、所属集団、後期群集墳との関係など解明すべき重要な諸問題が提起されている。これを受けて、近年における研究の活発化は著しいものがある。

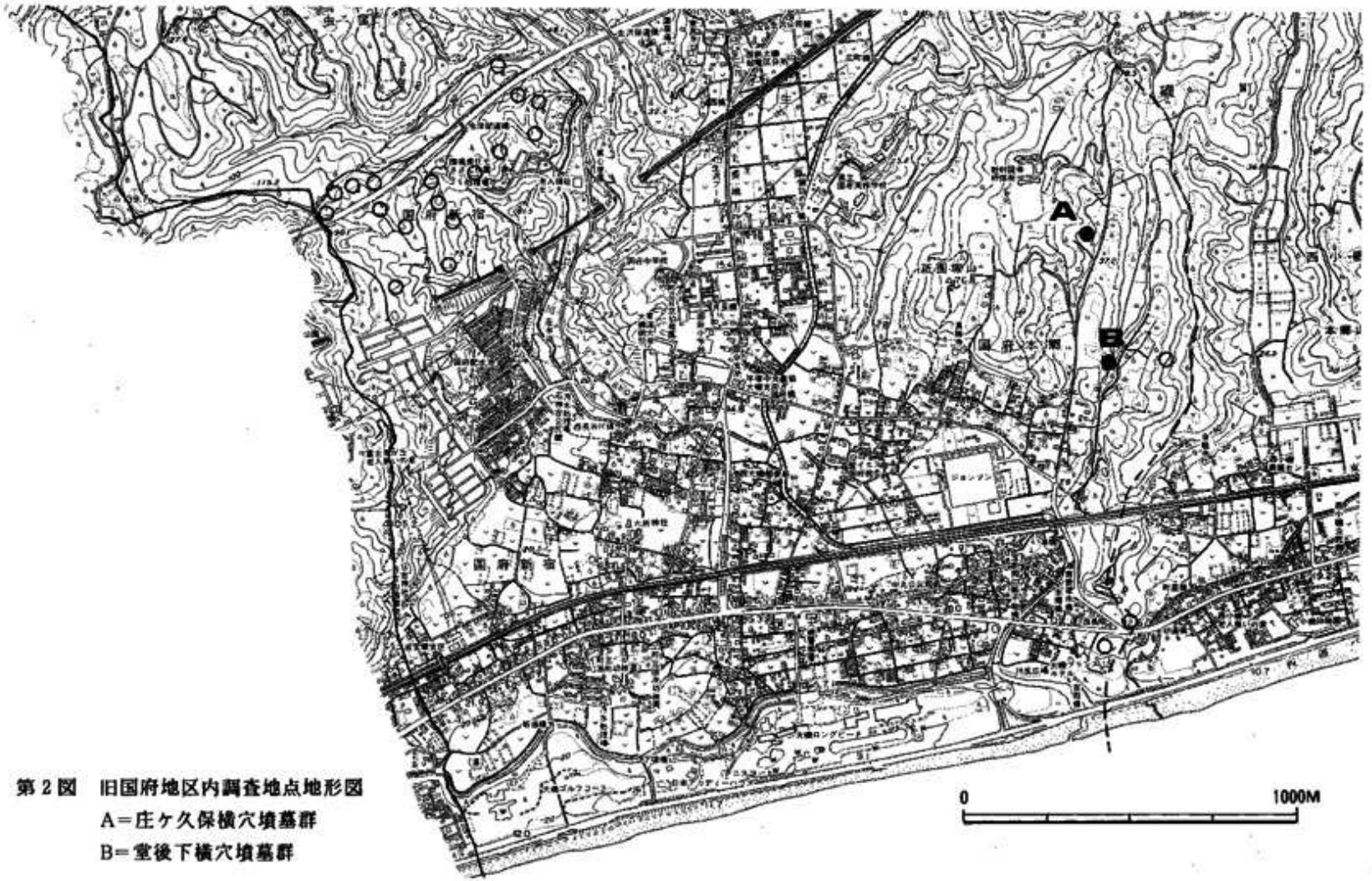
神奈川県下には約550群、3200基を超える横穴墳墓が存在する。大磯丘陵南部、三浦半島東部、相模湾北東部沿岸、多摩丘陵南部はその中でも濃密な分布を示す地域として知られている。先に挙げた横穴墳墓の諸問題を解明するにあたり、横穴墳墓の群単位での実態把握調査の必要性を考え、当館では昭和60年度より、県下で最も分布密度が高く例数の多い大磯丘陵地域の横穴墳墓群を対象として、調査を開始した。群単位の実態把握調査では、1.所在地（再確認・消滅例追跡を含む）、2.群構成、3.墳墓形式・構造、4.時期、5.出土遺物等の記録集成を長期計画で、段階的に進めることにした。第1段階として、横穴墳墓群の立地的特性を把握するため大磯丘陵地域における分布調査を実施すること、横穴墳墓の形式・構造を把握するため計測可能な横穴墳墓の実測記録による基礎資料を収積することを目標とした。

大磯丘陵は相模湾北部沿岸に位置し、北半は所々に高所や盆地状低地が存在するが、概して緩やかな起伏を呈す。南半は南向きに開口した狭長な大小の支谷が発達し、縁辺は断崖状の急斜面をなすなど複雑で起伏に富んだ地形を呈す。大磯丘陵全域での横穴墳墓群は約120個所が知られるが、平塚市西部、大磯町、二宮町などの南半縁辺部に約100個所という片寄った傾向を示す。さらに、大磯町を中心とした丘陵東南部には全体の約60%にあたる71個所が偏在的に存在する。本調査は大磯丘陵地域の中でも最も濃密に分布する大磯町地区を重点に進めることにした。

大磯町はその4分の3が大磯丘陵地の上に乗り、北端に高麗山、浅間山を望む。西域の城山付近には海岸線まで突出した尾根が町域を東西に二分するかたちで延びる。東側の地形は急斜面をもつ大小の支谷が非常に発達しており、西側との様相に違いがある。この違いは横穴墳墓の築造に深い関係があったことが想定される。すなわち、大磯町所在の71個所の横穴墳墓群のうち、約3分の2の49個所が東側に、22個所が西側に存在しており、東側に横穴墳墓築造の地形的条件が整っていたと判断できる。調査作業を進める上で、東側を旧大磯地区、西側を旧国府地区と仮に区分した（第1図）。

前号－大磯丘陵横穴墳墓群(1)－では今回の調査結果に先立ち、昭和43年に当館で発掘調査を行なった旧大磯地区に所在する後谷原北横穴墳墓群の概要と、調査以降の研究成果や今回調査の目的に照らして、多少の補足説明を行った。本報告書は昭和61年3月15日から3月24日までの延10日間、旧国府地区に所在する庄ケ久保横穴墳墓群と堂後下横穴墳墓群を対象に現地調査を踏まえて行なった成果である。

第1図　大磯町域内横穴墳墓分布地域仮区分図



第２図　旧国府地区内調査地点地形図
A＝庄ケ久保横穴墳墓群
B＝堂後下横穴墳墓群

Ⅱ．大磯町所在横穴墳墓群個別記録

1．庄ケ久保横穴墳墓群（第２図Ａ．図版１－(1)）

(1). 所在区分＝旧国府地区

(2). 所在地＝大磯町国府本郷小字庄ケ久保1844・1846

(3). 存在基数＝９基（確認）；第１号～第９号の全基を発掘調査

(4). 調査基数＝１基；第８号

(5). 出土遺物＝第１号……須恵器平瓶・甕・坏破片４

第２号……尖根鉄鏃破片

第３号……須恵器甕破片、須恵器高台付長頸瓶１、水晶製切子玉２、直刀破片、鉄鏃破片、金環１

第４号……なし

第５号……須恵器甕破片、鉄鏃破片

第６号……土師器破片、尖根鉄鏃破片

第７号……土師器丹彩坏破片

第８号……須恵器甕・坏破片

第９号……なし

昭和28年に予備調査、30年に本調査が神奈川県教育委員会（発掘担当者赤星直忠）によって行なわれた。旧大磯町の西端、北方の万台から南方に城山まで延びる尾根があり、この基部から分かれて西側に並んで延びる小尾根の先端に通称「なこう山」がある。このなこう山の西側には小支谷がいくつか形成され、さらに小谷を刻んでいる。庄ケ久保横穴墳墓群は通称「マリヤ山」の東側裾の谷に面した標高約37mの所に位置する。横穴墳墓群は軟質泥岩を掘削して３～４mの間隔においてほぼ横一列に９穴が並び、全部が開口していた。昭和30年の調査では全横穴が発掘されている。すべてがアーチ型断面で、奥壁は蒲鉾形をし、やや前方に傾斜する。床面は第２号横穴が方形に近い形、第６号横穴が玄室と羨道との境でわずかにく字形に折り曲がる形、他は玄室と羨道との境がない形である。また、第１号横穴は奥壁中央に第２羨道を造り、その奥に横長の棺室を設けている。第２号横穴と第６号横穴には低棺座がある。第５号横穴・第７号横穴・第８号横穴・第９号横穴には天井から側壁に至る面が肋状に仕上げられることと、奥壁近くの床面に礫が敷かれるという共通性がある。このうち第８横穴は奥壁と左壁奥壁寄りに人物を模した線刻画が描かれていることで注目された。本調査は庄ケ久保横穴墳墓群のうち主体を占める、玄室と羨道との境のない平面形を呈し、内部壁面に線刻画が描かれている第８横穴を精査対象とした。

庄ケ久保第８号横穴墳墓（第３図．図版１－(2)）

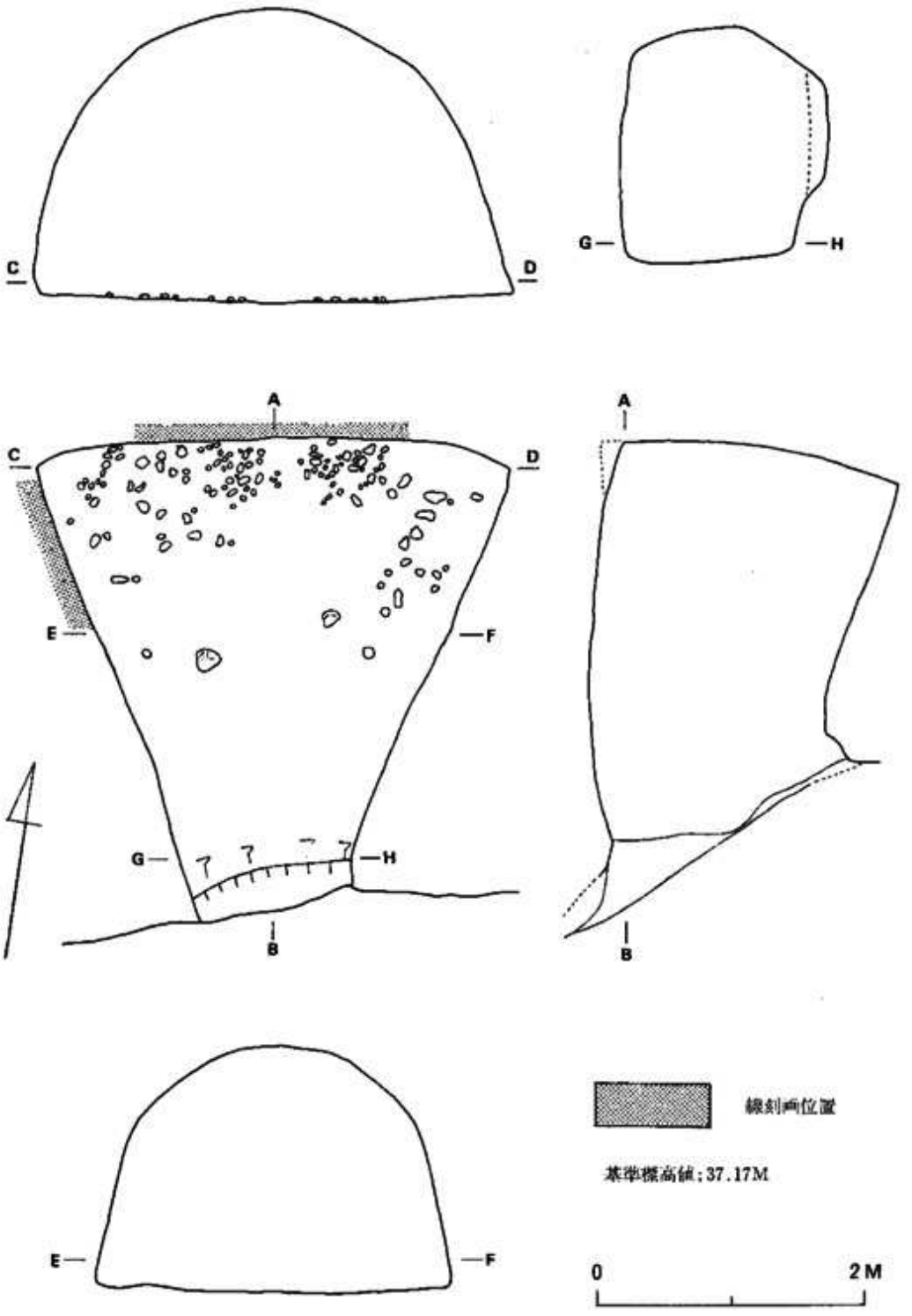
南北へ一列に並ぶ横穴墳墓群のうち、北側より４番目に位置する。玄室と羨道の明確な区別がなく、主軸方向はN－20°－Wを示す。平面は三角形に近い形状を呈し、主軸を中心に左右はほぼ対称形をなしている。天井の形態は玄室奥壁から開口部に向かって漸次縮少する、いわゆるアーチ型断面である。各部分の規模は、羨門幅127cm、同高さ170cm。奥行323cm。玄室最大幅（奥壁）360cm、同高さ225cmである。また、横断面をとった場合、その頂部はほぼ主軸上に乗り、本横穴が平面的にも、立体的にも極めて均整のとれていることをうかがい知る。

羨門は逆Ｕ字形で、崖面を斜めに開口し、右壁側にやや開くため主軸方向とは直交しない。上端が弧状を呈する隅丸長方形といった形で、右側の一部は崩落している。羨門部の床面上90cm付近を境に崖面を掘削する際の角度が異なっている。上部は床面に対して55°であるが、下部は90°近い急傾斜になり、傾斜の変わる部分には稜が見られる。上部の一部には崩落と考えられる個所もあるが、全体の遺存状態からすれば構築時の状況を保っていると思われる。このような羨門部の構築手法については大磯町下田（しもだ）横穴墳墓群や後谷原北横穴墳墓群でも認められ、既に指摘されたところである。

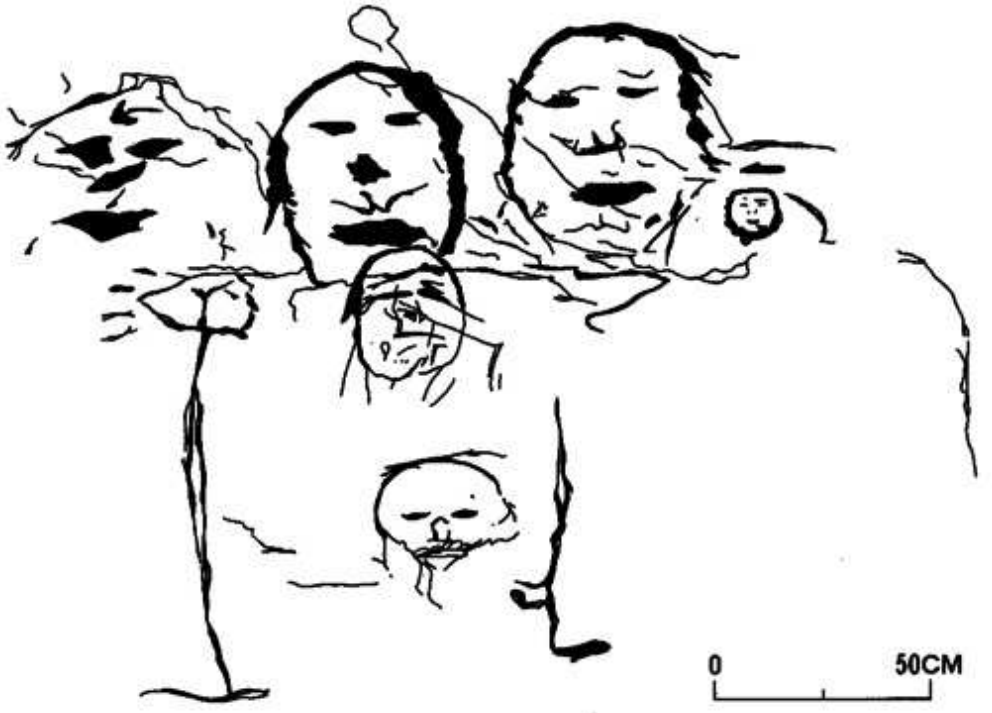
奥壁は蒲鉾形で、主軸方向と直交している。低部から次第に前方への傾斜を増加し、頂部は最大幅および最大高のある奥壁から35cmの点にくる。奥壁から羨門に至る天井の高さは次第に低くなり、高低差は55cmを数える。天井と側壁とで構成される断面の形は、羨門に向かうにしたがって幅に対する高さの数値が増し、横長の半楕円形から縦長の半楕円形に変化する。

床面は小さな凹凸を見せながら奥壁から緩やかな傾斜で下降し、190cmの所でほぼ同程度の傾斜で上昇し、羨門に至る。奥壁から175cmの範囲に礫が散存している。礫の大きさは最大で20cm、最小で２cmであるが10～15cmのものが多数を占め、奥壁寄り60cmの所に比較的まとまったゾーンがある。床面に密着しているものの、後世に移動があった可能性を考慮しなくてはならないが、礫の散在範囲は築造時の礫床範囲を大旨示しているものと推定できる。

天井、奥壁、側壁の各面は入念な整形が行なわれている。特に、天井から側壁にかけては幅７～８cmの金属製工具により肋状に仕上げられ、平行な削痕は文様的で美しい。線刻画は奥壁と左壁奥に描かれている。奥壁に描かれた線刻画（第４図．図版２－(1)）は、奥壁の中央部分縦160cm、横225cmの範囲に存在する。大小５つの人の顔らしきものが上・中・下の三段に認められ、それぞれには目・鼻・口が刻まれている。上段には４つの顔があるが、左端は頬より下の輪郭線がはっきりしない。右端は長さが12cmと最も短い。間の２つは長さが50cm前後で楕円形を呈し、顔の輪郭を３～５cmの凹線で表わしている点で共通している。中段の顔は奥壁の中心にあり、上段の左から２つ目の顔の左顎下に位置する。長さ30cmと小型になるが、形状や輪郭の表現は上段の２つに似ている。上段の輪郭線を断ち切って刻んでいることから、こちらの方が後に描かれたことになる。この直下に下段の顔がある。これも頬から下の輪郭線がはっきりしないが、風貌は上段の２つや中段のものと似たところがある。いずれも顔より下に絵画表



第3図　庄ケ久保第8号横穴墳墓実測図



第4図　庄ヶ久保第8号横穴墳墓奥壁線刻画

第5図　庄ヶ久保第8号横穴墳墓左壁線刻画

現が認められない。中段と下段の顔の両側に垂下する棒状表現がある。左側は上に花か大型の葉が乗っているかのようで、下に棒状線を支える横位の短い線が引かれる。右側は上には何もないが、棒状線が下位で左へ2本、右へ1本分岐する。蓮の葉・茎を表わしたものであろうか。左壁奥に描かれた線刻画（第5図．図版2－(2)）は、縦92cm、横125cmの範囲に存在する。人の像状のものが3つ認められ、やはり目・鼻・口がそれぞれに刻まれている。これらは横一列に並び、中央にあるものが最も秀れた表現になっている。円形の顔に目を箭き加減にし、鼻孔を付け、口は大きく切れ上がっている。耳は右耳を大きくし、垂耳に刻む。左手を耳横に曲げて上げ、右手は胸前に曲げる。胸・胴は明瞭ではないが、脚部と区別して刻んでいる様子がうかがえる。また、手先には指を表す短い線が明確である。頭上には3本の対角線で構成されたものが乗る。目と目の間には小孔があり、赤星直忠博士はこれを白毫（びゃくごう）にみなしている。この像の左に円、右に五角形の顔が刻まれている。耳はなく、顔より下に身体表現が認められない。左の顔の上と左上に不正方形を呈するもの、左下に不明な形の刻みがある。

前庭部は前面がみかん畑にかかるため全容を知ることができないが、主軸方向と直交せずに羨門と同角度で右壁側にやや開いて切られている。羨門床面との間には35°の傾斜で段差が認められ、現状確認面では32cm以上下がる。段差の終局状況や前庭部の幅、奥行など構築施設の把握は今後の発掘調査に頼らざるを得ない。

遺物は発掘調査の際、須恵器甕・坏破片が検出されているが、所在不明のため実見不可であった。

2．堂後下（どうごした）横穴墳墓群（第2図B）

(1). 所在区分＝旧国府地区

(2). 所 在 地＝大磯町国府本郷小字堂後下

(3). 所在基数＝13基（確認）；第1号～第13号のうち第4号・第9号・第12号を発掘調査

(4). 調査基数＝1基；第9号

(5). 出土遺物＝第4号……須恵器甕破片、直刀破片4、鉄鏃破片9

第9号……須恵器甕・坏破片各1、直刀破片2、尖根鉄鏃破片3

第12号……須恵器甕破片1

昭和28年に予備調査、30年に本調査が神奈川県教育委員会（発掘担当者赤星直忠）によって前の庄ケ久保横穴墳墓群と共に行なわれた。北方の万台から南方に城山まで延びる尾根から分岐し、その西側から併行して南へ延びる尾根先に通称「なこう山」がある。このなこう山の東側中腹、標高約25cmの所に堂後下横穴墳墓群が位置する。横穴墳墓群は軟質泥岩を掘削して3～4mの間隔をおいて上下二列に並び、上段が2基、下段が11基となっている。東側前面は水田が広がり、これに接する山腹の裾には小路が南北に走る。横穴墳墓群の前部はこの小路のた

めに一部崩壊されている。昭和30年の調査では第４号横穴・第９号横穴・第12号横穴の３基が発掘された。予備調査の際の覚書によれば、崩壊の甚だしい第７号横穴を除く各横穴の形態の概要を知ることができる。すべて奥壁は蒲鉾形で前傾するが、第１号横穴・第２号横穴・第３号横穴・第４号横穴・第６号横穴・第８号横穴・第13号横穴は天井の形態がアーチ型断面をし、床面は玄室と羨道の境がない形である。第５号横穴・第９号横穴・第10号横穴・第11号横穴・第12号横穴は天井の形態がドーム型断面をし、床面は玄室と羨道の明確な区別があり、玄室は隅丸胴張方形に造られ、礫が敷かれている。このうち第９号横穴と第12号横穴の奥壁・右壁・左壁の各面には線刻画が描かれていることで注目された。本調査は堂後下横穴墳墓群のうち、隅丸胴張方形の床面を明確に遺存し、内部壁面に線刻画が描かれている第９号横穴を精査対象とした。

堂後下第９号横穴墳墓（第６図）

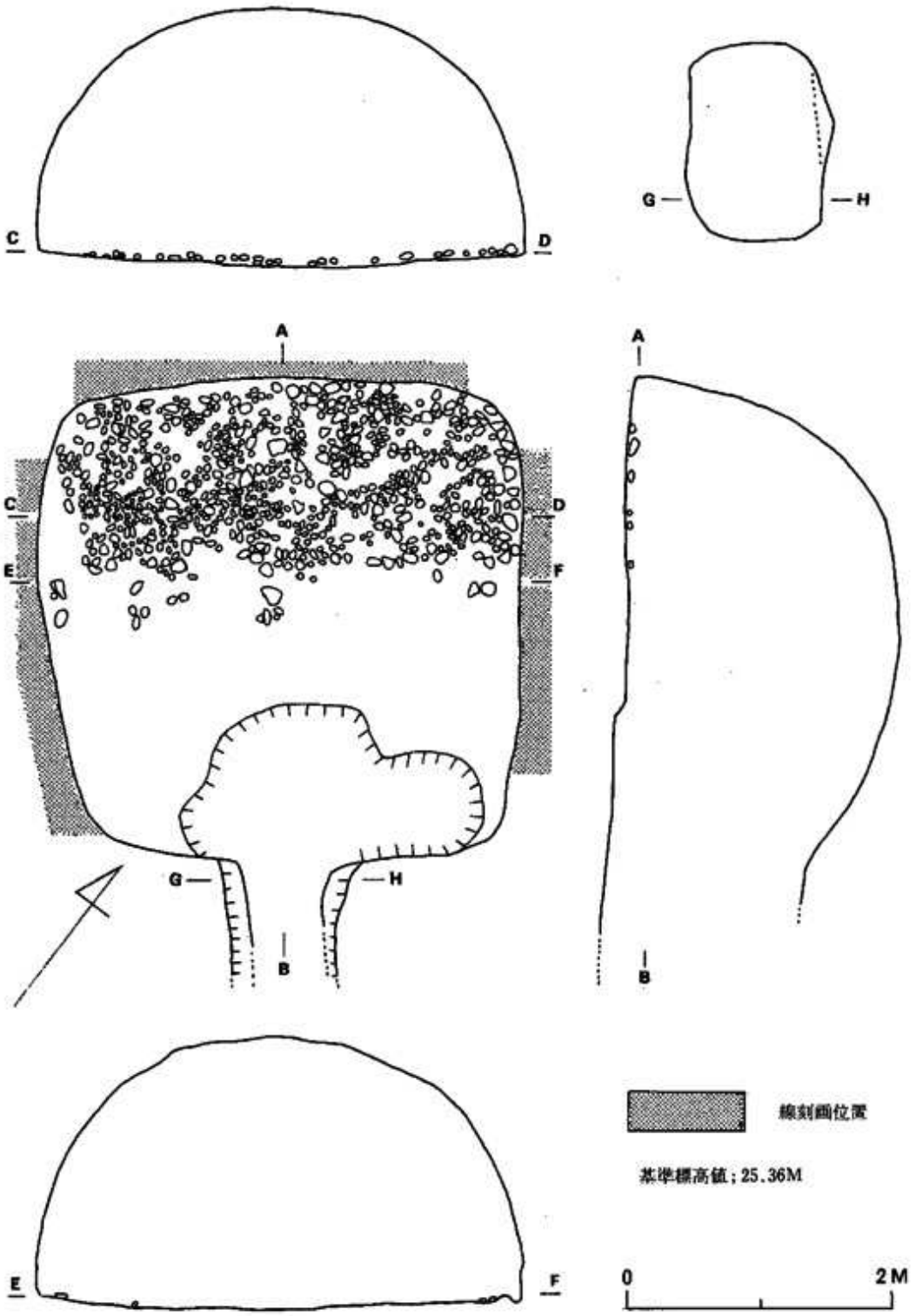
山腹に沿って南西から北東に二列に並ぶ横穴墳墓群のうち、下段の右側に位置する。玄室と羨道は明確に区別され、主軸方向はＮ－36°－Ｗを示す。平面は隅丸胴張方形で、主軸を中心に左右は対称形をなしている。天井の形態は玄室奥壁から開口部に向かう時、玄室の中程を頂点として緩やかな弧をえがく、いわゆるドーム型断面である。各部分の規模は、玄室奥行366㎝、同最大幅366㎝、同高さ208㎝。玄門幅110㎝、同高さ152㎝。羨道長さ（現存長）96㎝である。また、各横断面の頂部はほぼ主軸上に乗り、本横穴が平面的にも、立体的に精密度の高い築造であったことをうかがい知る。

玄室の平面は奥幅より前幅が若干狭くなるが、奥行と最大幅が等しく、隅丸正方形の形状を呈す。床面は小さな凹凸を見せながら奥壁から緩やかな傾斜で下降し、250㎝の所で５㎝の低い段差をもって、再び緩やかに下降を続け羨道に通ずる。低い段差は奥行120㎝、幅230㎝の範囲で不正形であるが、羨道や主軸を中心にして広がっていることが理解できる。奥壁から190㎝の範囲に礫が敷かれている。礫の大きさは最大で20㎝、最小で２㎝であるが10～15㎝のものが多数を占め、奥壁寄り150㎝の所で特に敷き詰まった状態になっている。玄室左前壁付近にも30×75㎝の小範囲に散在するが、攪乱を受けた後、ここに寄せられた状況を呈している。奥壁寄りに認められる礫は、その状態から築造時の礫床範囲を示すものと考えることができる。

玄門は右前壁の一部が崩壊しているが、縦長の隅丸長方形であることが察知できる。主軸方向と直交し、玄門の床面に対して直角に開口している。上端は玄室から下がる天井とつながり、下端は玄室床面の低い段差とつながっている。

奥壁の断面は蒲鉾形を呈し、主軸方向と直交している。底部から前方への傾斜が強くなり、弧をえがいて天井がドーム型の断面をなす。その頂部は玄室の中程で、最大幅の近くにある。

羨道は現存長96㎝の床面を残す。前壁の中央につき、主軸上に延びる。玄門付近が80㎝と幅が広く、前庭部側に向かって幾分狭くなる傾向が見える。羨道の床面の両端には幅10～18㎝、



第6図　堂後下第9号横穴墳墓実測図

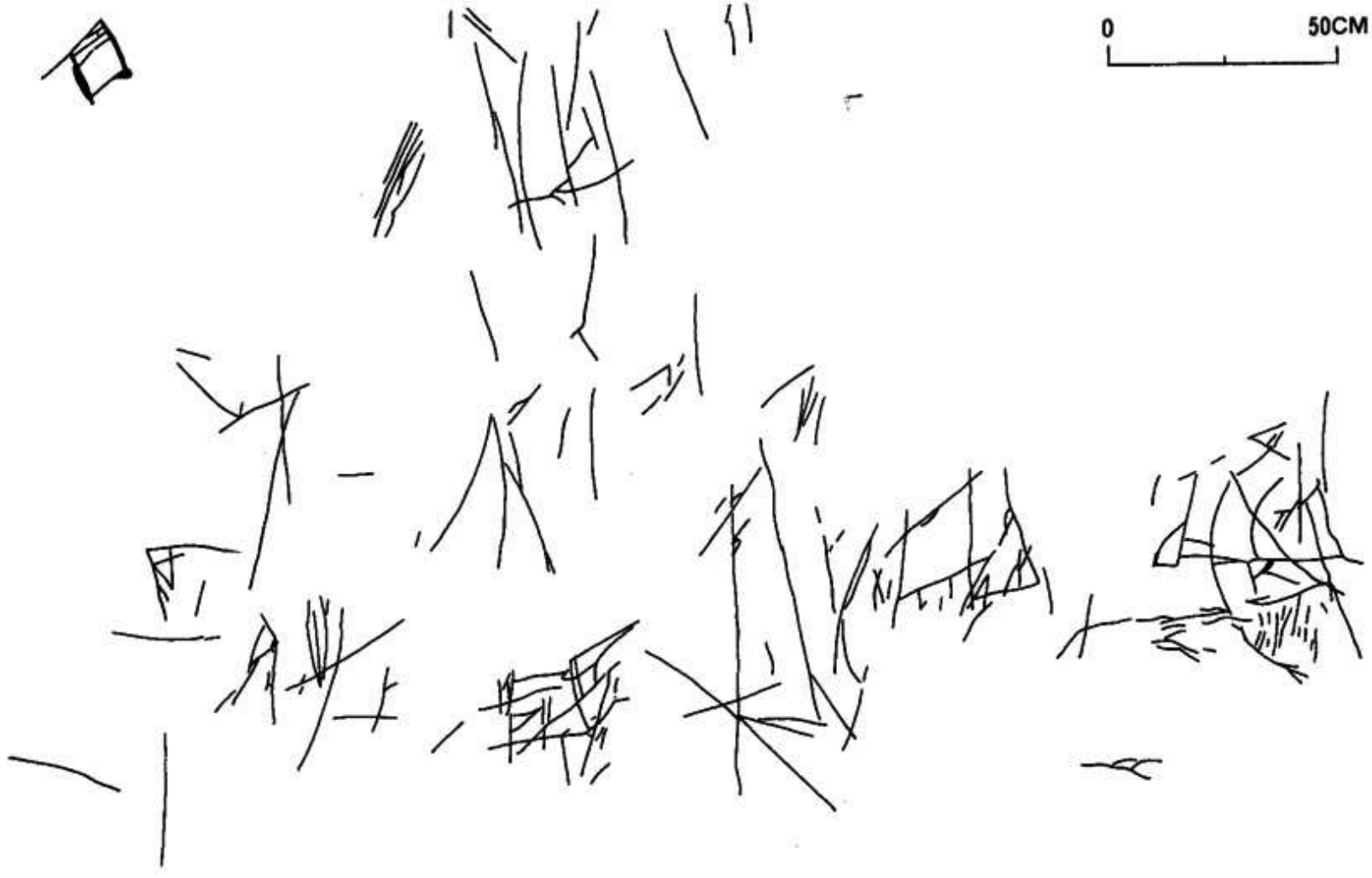
深さ４～５㎝の溝が走る。玄門前の低い段差は、玄室内の排水施設であると考えられ、ここに集められた水が更に羨道両端の溝に落ちて排水されたものと思われる。羨道の天井は玄門より30㎝程度しか残存せず、その先は崩落のため不明である。また、前庭部についても同じ事情で手がかりがつかめ得なかった。

線刻画は奥壁、右壁、左壁に描かれている。奥壁に描かれた線刻画（第７図．図版３－(1)）は、奥壁の中央部分縦165㎝、横295㎝の範囲に存在する。顔らしきものが３つ、梯子状のものが２つ、三角に尖るものが１つ、比較的広い面の中で絵画的表現が見られる。他は意味不明の線が多数飛びかう。顔は右上方に１つと中央寄りやや下に２つある。右上方の顔は円形で、目・鼻・口・が刻まれている。直下に首・腕・胴・足をつけているかのような線があるが、この顔と１体のものか判定し難い。中央寄りの顔の一つは角張っており、目・鼻・口が刻まれているが、顎の線を失っている。この顔のすぐ下にもう一つの顔がある。円形で目は刻んでいるが、鼻と口がない。頭に円錐形のものを乗せ、２本の縦線で体を表わし、そこから両腕が横に伸びている。左手には先端が又状の棒を持ち、体の下方に途中が断ち消えた反りのある刻線が認められる。この構図は鎌倉市洗馬（せば）谷第２号横穴墳墓で認められた、冠を被り舟に乗るものに似たところがある。梯子状のものは同じ高さであるが、離れて描かれている。１つは右上方の顔の横である。いずれも間を短い横線で埋め、中心部に縦線を１本入れている。上端は横線で止められているが、下端は３本の縦線が垂下したままである。三角に尖るものは中に舟形が刻まれている。竪穴住居のようにも思え、梯子状のものを梯と見立てれば、これを見おろすかのようである。右壁に描かれた線刻画（第８図．図版３－(2)）は、縦190㎝、横260㎝の範囲に存在する。右側に１人の人物、中段に放射状に垂れ下がるものが数個、そして奥壁にも見られた梯子状ものが２つある。他にも何らかの意図のありそうな線刻が存在する。人物は顎先の尖った顔をし、目・鼻・口は丸い小穴で表わしている。胴・手・足は不鮮明ながら表現されているようにも見える。頭上に数本の短線が認められる。梯子状のものは奥壁の場合と同様な表現で近接して存在するが、間に短い横線が埋まらなかったり、中心部に縦線を入れてない段階のものが３つある。放射状の刻線は右壁面では特徴的なもので、赤星直忠博士はこれを竪穴住居の屋根を表わす意匠と考え、群集する村落を推定している。舟形、弓形の崩れた刻線も散存するが意匠は判然としない。左壁に描かれた線刻画（第９図）は、縦175㎝、横295㎝の範囲に存在する。奥壁画や右壁画のような人物や梯子状のものはなくなり、30～40㎝の線が角度を変え刻まれている。集合化した形で認められるのは、奥壁寄りに１個所、上方に１個所、下方で３個所である。下方の２個所に菱形の共通的な構図を見ることができるが、何を表現したものか具体的なイメージがわかない。

遺物は発掘調査の際、玄室内より須恵器甕・坏破片各１、直刀身・茎破片各１、尖根鉄鏃破片３が検出されているが、所在不明のため実見不可であった。なお、その後大磯町教育委員会による確認分布調査の際に、金環１が採集されている。

第7図　堂後下第9号横穴墳墓奥壁線刻画

第８図　堂後下第９号横穴墳墓右壁線刻画



第9図　堂後下第9号横穴墳墓左壁線刻画

Ⅲ．調査所見

構造形態

庄ケ久保第８号横穴墳墓は玄室と羨道との境がなく、平面が三角形に近い形状で、天井の形態はアーチ型断面を呈するものであった。奥壁寄りに礫床があり、天井から側壁に至る間は金属製工具により肋状に仕上げられていた。排水溝や羨門閉塞施設の明確な痕跡は認められなかったが、羨門床面との間に一段下がって前庭部が存在することが確認できた。前庭部が羨門床面より一段下がって造られる例は後谷原北横穴墳墓群をはじめ、数多く知られるところだが、大磯町北中尾横穴墳墓群の第３横穴では階段状に構築されたことが判明している。しかもこの遺構の左隅には大型の須恵器甕と須恵器長頸壺が置かれ、前庭部が墓前祭祀の重要施設であったことを示唆している。羨門は上部と下部とで崖面を掘削する際の角度を変え、上部は緩く下部は急である。この境には稜が見られ、状況からは上部の崩壊によって生じたとは考え難い。このような羨門部構造は羨門閉塞方法との関係で検討しなくてはならない課題である。

第８号横穴の構造形態は本横穴墳墓群では多数を占めるが、第２号横穴や第６号横穴の構造形態とは異なる。第２号横穴は低棺座を設置し、玄室と羨道の区別のある、いわゆる片袖型の形態をとる。第６号横穴も低棺座を設置し、玄室と羨道の境がく字形に折り曲がる形態をとる。３基の構造形態の違いは、玄室の前壁が次第にその幅を縮少し、消滅して玄室と羨門との区別のない形になる時間的過程を示していると言える。第８号横穴のような形態をとるものが横穴墳墓の形態変遷の中で終末期に属するのであろうが、棺座、礫床、羨門、前庭部、排水施設など細部において地域差や時間差が検討される必要性もあろう。

堂後下第９号横穴墳墓は玄室と羨道が明確に区別され、平面が隅丸胴張方形で、天井の形態はドーム型断面を呈するものであった。奥壁寄りに礫床があり、玄門前には排水用の凹所が設けられる。羨道の両端にも排水溝が設けられ、床面が浸らない工夫が入念である。羨門と前庭部を欠くため外部施設については不明である。

第９号横穴の構造形態は13基ある本横穴墳墓群の中で、第５号横穴・第10号横穴・第11号横穴・第12号横穴と同形態である。他の横穴は天井がアーチ型断面で、平面が玄室と羨道との境のない形態である。前者は右方で一群をなし、後者は右方と左方でそれぞれ一群をなして存在する。従来の検討結果を踏まえれば、第９号横穴のような平面がいわゆる両袖型の形態は、片袖型のものより古い段階に所属するとされており、本横穴墳墓群の中では初期に築造されたことになる。このような形態をとるものも、細部において異なる所が認められる。第５号横穴の玄室平面は円形に近くなるし、第11号横穴は縦長で前壁の幅が狭い。また、第12号横穴は左前壁がほぼ消滅して片袖化し、天井の形態もアーチ型断面的になり、庄ケ久保第２号横穴墳墓の直前形態の様相を呈している。このことは各横穴墳墓が多少の時間差をもって築造されたことを示している。被葬対象者や形態変遷の時間的問題があるにせよ、本横穴墳墓群が築造された

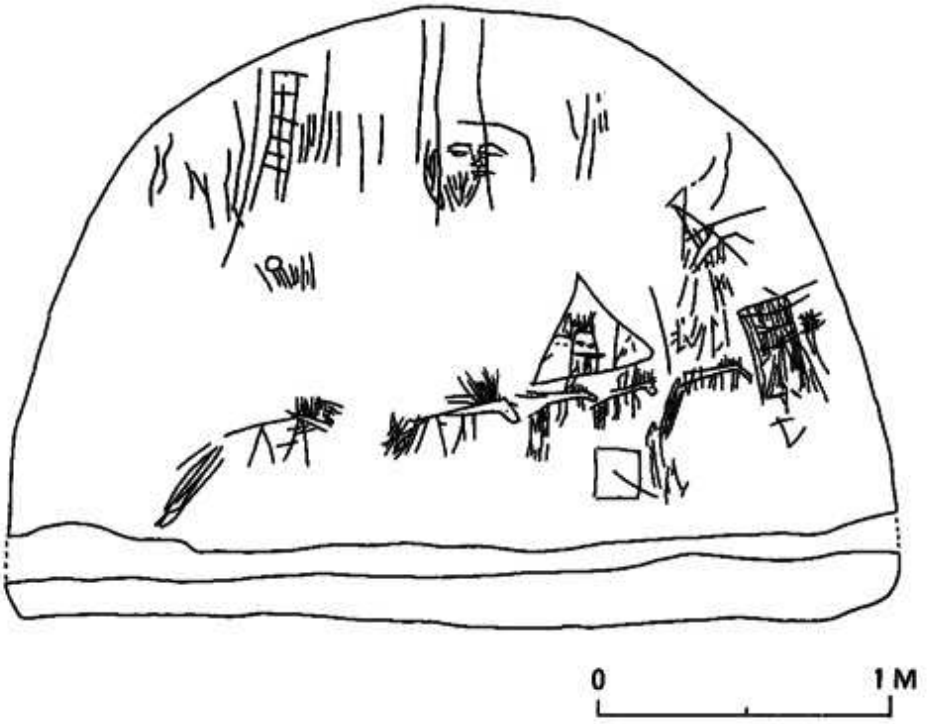
この場所は、第９号横穴墳墓の築造を初期に、幾度か構造形態の変化を体験しながら、相当期間墓域として存立していたことになる。

線刻画

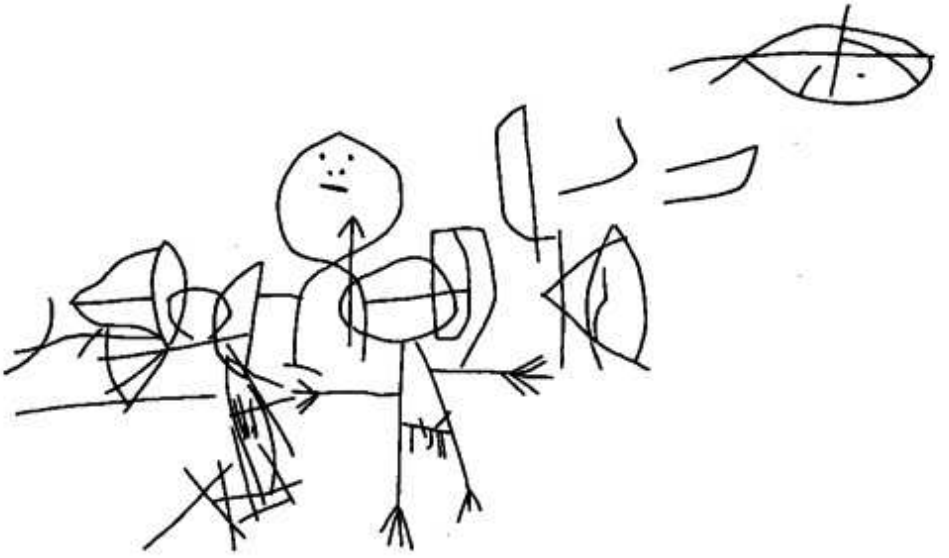
調査を行なった横穴墳墓のように、古くから開口状態にあったものについては後世の刻画の混在を当然考慮しなくてはならない。また、追葬など時間を経て葬送を行なうこともあるから、築造年代と必ずしも一致しない。しかしながら、数基あるいは十数基ある横穴墳墓群の中で限られた横穴にのみ存在するのであるから、線刻画をもつ横穴墳墓の群内での位置付けは高いところにあり、そこに描かれた絵画は被葬者と深い係りのあるものと推察される。

庄ケ久保第８号横穴墳墓の線刻画は人物を主体に描いている。奥壁画の大小の顔は正面を向き、首から下は描かれない。左壁画の三人も、両側の二人は同様の表現である。中央の人物のみ手・足を刻み、左手は曲げて上へ、右手は胸前へ曲げているがこれは動作的ではない。この状態で静止しているように見える。頭に冠のような器物を乗せ、両脇に配下の者を従える生前の被葬者の姿を準えたとしても、その風貌はすでに解脱している感を抱かせる。赤星直忠博士はこれを三尊仏と理解しようとしている。これらの線刻画はあたかも被葬者を見守るかのごとく描かれている。神奈川県内では寒川町岡田越ノ山第２号横穴墳墓、小田原市つくだ第４号横穴墳墓などに類例がある。庄ケ久保第８号横穴墳墓の築造年代は、構造形態から考えれば終末期に属し、８世紀後半に比定される。線刻画が描かれた年代はここを起点に考えるわけだが、この時期には仏教思想は政治的手段も加わって、地域的にも階層的にも浸透の度合いを深めていたことが想像できる。ここに描かれた線刻画もそうした仏教的な倫理感の影響を受けて成立したのであろう。

堂後下第９号横穴墳墓の線刻画は被葬者の生前の叙事詩的な様相を示す。左壁画は散慢で不明瞭な刻みが多いが、全壁面を通じての叙事詩と見てとれる。三壁面は共通の表現物を描きつつ、壁面ごとに題材を変える意図がうかがえる。人の顔は奥壁に多く描かれ、冠を被り舟上で手を広げた格好の人物こそ被葬者であろうか。三角形に描いた竪穴住居のようなもの、梯子状のものなどが配され、奥壁に絵画主体があるとも言える。梯子状のものは右壁にも描かれて、本線刻画で注意を引く。長目の縦線三本と短い横線数本の組合せであるが、比較的しっかり刻まれ、上端は短い横線で止まるが下端は縦線三本が垂下したままである。明確な４つは全て縦長の類似形態で描かれているが、果して何を象ったものであろうか。川崎市早野（はやの）横穴墳墓の奥壁に描かれた線刻画（第10図）に極めて似た形がある。五頭の馬、二人の人物などと共に、左上方に刻まれている。幡が翻っている意匠であるとする興味のある解釈もあるが、類例をまって検討すべき絵画としておきたい。右壁画の中で特徴的な放射状の刻線は、この壁面にのみ集中して存在する。竪穴住居の屋根を表わした意匠であるとする赤星直忠博士の考えは、村落内の被葬者の生活叙事であるとするなら、大変説得力がある。しかし、従来竪穴住居を表わすと思われる線刻画に比べ、屋根を葺く表現が入念すぎる点が気になる。一般的に、刻線による意



第10図　早野横穴墳墓奥壁線刻画



第11図　堂後下第12号横穴墳墓右壁線刻画

匠表現は稚拙で、簡略化されるのが普通である。右壁画の中では、人物以上に目を引く刻線である。他に類例が乏しいため、今後の検討課題とすべき図柄としてとどめたい。堂後下第9号横穴墳墓の築造年代は、構造形態から考えれば先の庄ケ久保第8号横穴墳墓より古い段階に遡り、8世紀前半頃に比定されよう。一群をなす第12号横穴の右壁にも叙事的で、第9号横穴に近似した表現様式の線刻画（第11図）がある。平面形は片袖型の形態をし、第9号横穴より新しい時期に築造年代が位置付けられるものである。両横穴における線刻画の近似表現を強い結び付きのあるものと考えるなら、第9横穴の線刻画は第12号横穴の線刻画が描かれる時点、つまり追葬時の所産と見ることができよう。しかしながら、このように叙事詩的に描く線刻画のこれまでの例では、多少の時間的な幅の中で、画法表現が類似することは一般的であって、横浜市熊ケ谷第2横穴墳墓、早野横穴墳墓、洗馬谷第2横穴墳墓など幾つかの例示を上げて指摘ができる。群内において、画法表現が一致する線刻画の成立時期が新しい時期に合わされることには問題が含まれる。更に、それが追葬の論拠に発展するのであるなら、一層慎重な検討を加える必要性を指摘しておきたい。

横穴墳墓は葬送の一形態であることは言うまでもなく、次第に仏教の思想的影響を強めつつ成立していたものと思われる。本調査の対象にした二つの横穴墳墓は、想像を逞しくすれば、人から仏に崇拝対象が変容する過程を示すものと言えるかもしれない。

引用・参考文献（採録順）

(1) 大磯町教育委員会（編）　「大磯町文化史」　昭和31(1956)年

(2) 赤星直忠　「神奈川県大磯町の横穴」　大磯町文化財調査報告第一冊　昭和39(1964)年

(3) 神奈川県教育委員会（編）　「神奈川県埋蔵文化財遺跡地図」　昭和43(1968)年

(4) 神澤勇一　「大磯丘陵横穴墳墓群(1)」　神奈川県立博物館発掘調査報告書第18号　平成1(1989)年

(5) 神澤勇一　「後谷原北横穴群」　神奈川県立博物館発掘調査報告書第3号　昭和44(1969)年

(6) 赤星直忠　「相模洗馬横穴群に就て」　考古学雑誌第35巻1・2号　昭和23(1948)年

(7) 赤星直忠　「神奈川県における横穴古墳の線刻壁画」　考古学ジャーナル№48　昭和45(1970)年

(8) 鈴木一男・國見　徹　「中部大磯町北中尾横穴墓群の調査」　第14回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨　平成2(1990)年

(9) 上田　薫　「神奈川の装飾横穴墓」　湘南考古学同好会々報42　平成3(1991)年

(10) 寒川町郷土会（編）　「岡田越ノ山横穴古墳群」　昭和31(1956)年

(11) 赤星直忠　「足柄下郡橘町の横穴古墳」　昭和34(1959)年

(12) 樋口清之・金子晧彦　「川崎市多摩区早野横穴古墳発掘調査報告」　川崎市文化財調査集

録第９集　昭和49(1974)年

(13) 三輪修三・村田文夫　「川崎市多摩区早野横穴古墳線刻画の一考察」　三浦古文化第18号　昭和50(1975)年

(14) 大竹憲治　「東国の横穴墓の発見・幡に関する資料」　考古学ジャーナル№240　昭和59(1984)年

(15) 池上　悟他　「№８・熊ケ谷横穴墓群」　奈良地区遺跡群発掘調査報告Ⅱ　昭和59(1984)年

(1) 庄ケ久保横穴墳墓群

(2) 庄ケ久保第 8 号横穴墳墓

(1) 庄ケ久保第 8 号横穴墳墓奥壁線刻画

(2) 庄ケ久保第 8 号横穴墳墓左壁線刻画

(1) 堂後下第 9 号横穴墳墓奥壁線刻画

(2) 堂後下第 9 号横穴墳墓右壁線刻画

神奈川県立博物館発掘調査報告書

第 19 号

平成4年3月30日 印 刷
平成4年3月31日 発 行

編集兼発行者 神奈川県立博物館
館長 岩野好秀
横浜市中区南仲通5－60

印 刷 所 ㈱ 野 毛 印 刷